

今回は合浦公園の桜祭りについてお知らせしましたが、今回は合浦公園の成り立ちについてお話しします。

合浦公園は元弘前藩士水原衛作みずはらえいさくが創設した県内有数の歴史を持つ公園です。水原は「人々が英気を養う場としての公園」という信念を持って公園創設申請を何度も出した末、ようやく明治14年(1881)に県から公園の開設が認可されました。当初は地名を冠して造道公園、または青森公園と称されていました。水原は自らの財産をつぎ込み、日夜造園に励みましたが、疲労がたたり公園の完成を見ることなく生涯を閉じました。公園内にはその功績を讃えて、記念碑が建てられています。



水原衛作・柿崎巳十郎の像

その後、水原の実弟柿崎巳十郎かきざきみじゅうろうが兄の意志を継承し、明治27年に公園としての景観が整いました。翌年、維持管理は青森町が行うこととなり、名称を合浦公園とすることにしました。

また、合浦公園は全国でも珍しい海浜公園で、明治41年(1908)日本人初の公園デザイナーで当時の造園技術の第一人者である長岡安平ながおかやすへいは「海のある公園は東北六県はもちろん全国でも多くはない。庭園家の垂涎すいえんする所である。」とっています。さらに



海浜公園として全国でも珍しい合浦公園

「青森の公園は大良公園であり、世界的公園である。」とも評しています。公園の権威、長岡の来青後、市民の評価も一変しました。公園は改修、敷地拡大などして、着実に市民の公園として姿を変えていきました。園遊会・運動会・祝賀会など市民による合浦公園の活用は多方面にわたり、昭和3年(1928)には海水浴場も開設されました。このような歴史を経て、合浦公園は青森市最大の名勝地かつ行楽地となり、また市民にとっても親しみのある公園となりました。



つつじ



藤の花

桜祭りが終わっても合浦公園では、紅白のつつじや藤の花々が次に控えて、出番を待っています。